2009/06/04 学習会記録

『歴史における個人の役割』第一回

藤田智久

０．権力論との関係（付け足し）

歴史学は国家権力についての議論とどのような関係があるのでしょうか。前回の学習会では郵政民営化とフランスのファシストの話を扱いましたが、両者は独占資本主義を基盤にしているという共通点があります。資本主義が独占資本主義＝帝国主義の段階に移行した19 世紀末以来、この一世紀の間、たしかに資本主義自体は大きく変化を遂げました。けれども、その本質は変わっていません。また、それ以前の資本主義（いわゆる自由主義段階）の時代の特徴も引き継いでいます。さらには、市民革命で資本家が権力を握ってからの国家の特質もおさえる必要があります。表面的には小泉（以前は）や御手洗などの権力者が支配しているように見えるかもしれませんが、彼らも階級的基盤がなければ支配を維持することはできません。もっと一般化していえば、絶対主義時代も古典古代もそれ相応の階級的基礎を国家権力は持っています。という観点から歴史を見てみたいと思います。

１．古典をどう読むか

『歴史における個人の役割』は広義での「古典」です。当然、現代との距離があるわけですが、資本主義時代という点ではもちろん共通点があるわけです。そこにこそ現代に生かせる普遍性があります。あと、読む際には「どこに争点があるのか」をいつも念頭におくと読みやすくなります。というのも、マルクス主義は、既存の思想を批判する中で発展してきた歴史をもっているからです。プレハーノフも、ナロードニキの思想を批判して克服する中で自己の思想を発展させました。批判する必要があったのは、それがどのように実践するかという問題に直結するからです。研究者は同時に活動家でした。最後に、読む際には現代の諸問題に照らし合わせることの意義を強調したいと思います。そこでこそ、古典の普遍性が明らかになります。

（要因説とは何でしょうか？）

歴史を動かす要因としていくつかを並列するだけで、それらの相互連関を見ない立場です。「個人」以外の社会的なカテゴリーに言及するにしても、それを動かしている根本を分析しようとしない。文脈は違いますが、カール・シュミットもそういう点では同じです。「友と敵の関係が政治においては根源的である」そうですが、なぜその関係が成立するのかを説明しません。シュミットは「友敵関係」を、体制的危機の例外状態においてとらえるため、それ以前の状況にある、文化団体などにも存在する階級的敵対関係を捉えられないのです。

（折衷主義とは？）

後で説明します。ただ、折衷主義は弁証法の仮面を被って表れることに注意しなければなりません。
（質問ではなく意見ですが、やはり解説書ではなく古典を読んで自分で確認することが重要だと思います。あとで引用して使えますし。それに、解説書は筆者のバイアスで歪められていることもあるので。）

２．プレハーノフが活躍した時代―――19 世紀ロシア
当時の状況を確認しておきましょう。ロシアでは絶対主義が 20 世紀まで存在しました。19 世紀も当然封建制が強く、資本家は権力を握っていませんでした。資本家はそんな政治に反発しつつも、労働者と対立するために貴族や皇帝と妥協する面をもっていました。それがフランスとの違いです。他方、封建的支配層も、国力を増加するために資本主義の発展を進めなければならないので、上からの近代化を推し進めます。そこで運動内部にも分岐が生じます。
一つはナロードニキです。彼らは、ロシアは結局資本主義化できないだろうから、古来の農村共同体をもとに社会主義を建設しようとしました。アナーキズムの傾向が強い流派です。けれども、やはり資本主義は発達しますから、それに伴いプロレタリアートも増加し、マルクス主義に立脚した運動が力を持ってきます。その過程でナロードニキだった人がマルクス主義者になります。プレハーノフもその一人でした。ナロードニキも二派に分裂し、そのうちの「人民の意志」派はテロリズムによって世界を変えようとしました。彼らは個人の役割を過大評価し、重要人物（皇帝など）の暗殺で専制体制を打倒できると考えました。マルクスもレーニンもテロを厳しく批判しています。それは運動の道を誤らせるからです。

３．通俗的なマルクス主義観への批判
　マルクス主義は、経済という土台（下部構造という言い方を私は知らなかったのですが、どうやらあるようですね）の上に政治や思想・文化などの上部構造が成立するという見方だとよく言われます。それは間違いではないのですが、土台が上部構造を一義的に規定するというのとは違います。「経済決定論」ではありません。いわゆるロシア・マルクス主義には決定論的なところもあったので、マルクス主義者側にも責任はあるでしょう。恐慌のたびに、変革の主体の力量を考えずに「資本主義は終わりだ」という言説も結構ありました。ですが、意図的にマルクス主義を歪めて決定論的に描き出す傾向が思想界にはあります。上部構造が土台に反作用するということはマルクス主義にもともと含まれていたのであって、アルチュセールの独創ではありません。
同時に宿命論でもありません。宿命論的理解は、実践の意義を低める間違った見解です。個人の役割を否定するわけでもありません。これはテキストのとおりです。それについてもナロードニキ側の理解は粗雑なものでした。十月革命前にロシアの首相だったケレンス

キーが「あるマルクス主義者から、『マルクス主義において個人は意義を持たない』と言われ、マルクス主義は個人を大切にしない思想だと気づいた」などと言ったという逸話がありますが、これは誤解であって、誤解をもとに反発するのは全くの独り相撲です。

４．弁証法

弁証法の「対立物の統一」という考え方は「西洋的な二項対立だ」と言われます。私としては、西洋的か東洋的かという分け方自体が意味を持たないと思います。問題なのは、事実としてどうか、です。だいたい、階級闘争が二者間の単純な対立だったことなど一度もありません。マルクスの『資本論』に書かれているイギリスでも、貴族は隠然とした勢力をもち、純粋な資本主義ではありません。世襲制の貴族院が選挙制の庶民院の法案を葬る権限は 1911 年まで失われることはありませんでした。矛盾は現実には何重にも複雑に現れます。その中から、主要な矛盾をつかまえることこそが重要なのです。

次に、その対立物の揚棄という側面を見ましょう。プロレタリアートとブルジョアジーの対立は、プロレタリア革命によって消滅します。これは、全員がプロレタリアートになるという意味ではありません。このあたりがキルケゴールなどによって意図的に歪められているので要注意です。そうではなく、ブルジョアジーがなければ、生産手段は社会全体の共同管理になって、無産者もいなくなるのです。それまでプロレタリアだった人はブルジョア文化やブルジョア科学からその精髄を学び取る（しかし同時にその腐敗した部分は厳しく排斥する）だけでなく、それまでのあらゆる人類の遺産の進歩的要素を相続し発展させて初めて、社会主義を築けるのです。弁証法的な対立のとらえ方とはこういうものです。それが、折衷主義になると「革命なしで共存しよう」とか、「階級が意味を持たない新しい資本主義になり、そのうち社会主義へ進化する」とかいう発想になります。

次に、対象を動的な過程の中で観察することが大切です。だからこそ、歴史学が必要なのです。一見したところ、権力を握っている側は強大に見えます。変わらないようにみえます。けれども、今までの歴史を振り返れば、経済における危機の爆発が政治体制の崩壊をもたらし、その時における運動側の適切な方針と行動が革命への道を切り開いたことが分かります。たえず変化するものとしてとらえるべきです。

三番目に、その対象を、個別に見るのではなく、全体の連関のなかで分析することの重要性を強調したいと思います。まさにこれが「歴史における個人の役割」というテーマなのです。詳しくは６で触れます。

あと、自由の定義があります。これは重要な個所です。「～からの自由」（例：圧政からの自由）というふうに自由を定義することは間違いではありません。けれども、例えば資本主義における抑圧から自由になるためには、歴史発展の法則に沿う方向で行動しなければならないわけです。それは歴史の必然性の通りに生きるということですが、それは拘束ではありません。「こうするしかない」ということを自覚した人にとっては、それこそが自由です。その意味で、「深奥な定義は、表面的な定義を否定するのではなくて、それを補足し

ながら自身の中に維持するのである」（pp.18-19）ということなのです。
今、「行動」という言葉を使いました。たしかに社会の進歩は必然ですが、それはその過程の中で諸個人が、歴史を前に進める方向で行動して初めてそうなるのです。何もしなければそれだけ歴史が進むのは遅くなります。「個体が一般者のなかに解消する」（p.78）というのは、「人々（一般者）が歴史を動かすなら、自分（個体）は寝ていてもいいだろう」ということです。そうではなく、個別の中に一般性を見出すべきです。自らも歴史を動かす一要因なのです。
（「観察する」と言うが、観察者はどこにいるのでしょうか？）
高みから観察することも可能ではありますが、望ましいのは実践に加わる中で当事者として観察することです。実践によって、理論が正しいかどうかをたえず検証し、正しい方針を得られるからです。

５．唯物論
唯物論は、まず、対象が客観的に実在するということから出発します。主観的認識を一歩一歩客観的実在と一致させることが大切であり、またそれは可能です。確かに、現象には様々な側面があるでしょう。ただし、物事はただひと通りにしか起こりえないのであって、多様な側面を総合することで全的な認識に至ることは可能です。現社研掲示板に私が 2 月 12 日に書いた例を参考にあげたいと思います。興味がある方はお読みください。たしかに、こう夢のない現実を見るにつけ、キツネが非日常を運んできてくれないかなあ、とか思いそうになりますが、やはり事実は事実として厳密に認識すべきでしょう。
話をもとに戻しましょう。我々の意識についてです。「存在が意識を規定する」という命題の通り、考え方も経済という土台によって究極的には（あくまで究極的には、ということが重要です）決まります。例えば、資本家にとっては「解雇されても自己責任」だと労働者が考えてくれれば都合がよいので、当然自分でもそう思います。けれども、労働者にとってそれは生活の糧を失うことを意味するので、承服できない人が出てきます。階級の違いによって考え方は違ってきます。ただし、この段階では無自覚的です。逆に、労働者の中にも資本家のイデオロギーに影響されて「自己責任だからまあしょうがないか」と考える人が出てきます。けれども、労働者がマルクス主義を、就中マルクス経済学を学べば失業が資本主義の運動法則に起因することが分かり、虚偽意識を払拭できます。そして資本家階級と闘う中から社会主義への展望を切り開けます。その意味で「自由とは必然性の自覚である」（p.16）ということです。
（主観的認識が客観的実在に影響を与えることはないのでしょうか？）
行動が歴史の成り行きを左右するのは確かです。ただ、それ以外に、例えば量子力学では観察だけで結果を変化させたりすることがあるそうです。私は素人なのでよく分かりませんが、この仕組みについては、ダーリング『テレポーテーション　瞬間移動の夢』（光文社）や、ランドール『ワープする宇宙』（日本放送出版協会）などに詳しいです。私は何度読ん

でもさっぱり分かりませんでした。文系が読むならこの二つがお勧めです。タイトルにぎょっとするかもしれませんが、怪しい本ではありません。
（しかしこれは社会科学には影響しないのでは？）
そういうことにはなりません。唯物弁証法は科学の発展とともに変化し発展するのであって、自然科学で唯物論に疑問が投げかけられたら、徹底的に検証しないといけないでしょう。とはいえ、経済における人間の行動に対し、人間の体を形成している「ひも」（すなわち粒子の存在確立であり、情報である）の揺れが影響を与えているはずはまさかないでしょう。
（質問ではないのですが、『情況』6 月号にフォイエルバッハ・テーゼに関する論文が載ります。マルクスは唯物論をフォイエルバッハから受け継いだわけで、やはりそこにさかのぼってマルクス主義との関係を考える必要があるでしょう。以上、宣伝まで。）

６．歴史の見方
→ここは時間がなくてレジュメを読んだようなものですので、以前お送りしたレジュメをご覧ください。

７．現代の諸問題によせて
→ほとんど流しました。レジュメの通りです。

８．これからの読書会をどう進めるか（提案）
→四回に分け、テキストの一・二章を次回は扱います。報告は近藤君が引き受けてくれました。ただ、学習会をそれだけにするのではなく、すでに出された論点を議論する形で進めると効率的だし、テキストも分かりやすくなるでしょう。

以上